

釧路湖陵高等学校 釧路湿原巡検 実施内容

《概要》

[日程] 2018年6月26日(火)

[参加者] 理数科1学年39名、宮城県多賀城高等学校4名

[講師] 渡辺 修(さっぽろ自然調査館)

渡辺 展之(さっぽろ自然調査館)

矢部 敦子(環境省釧路湿原自然保護官事務所)

中西 誠(環境省釧路自然環境事務所)

[単元] SSH科目「KCS基礎」

[釧路湿原巡検の目的] 湿原環境の保全を目的とした環境調査の手法を学び、環境科学における科学的な探究手法を研修するとともに、自らが生まれ育った自然環境を科学的に理解する機会とすることを目的とする。

[実施プログラムの概要]

9:00 達古武オートキャンプ場にてオリエンテーション、レクチャー

9:30 グループ毎にフィールドワーク(昆虫、沢の生物)

14:50 夢ヶ丘木道、夢ヶ丘展望台でのレクチャー

16:40 研修終了

《実施内容(記録)》

※夢ヶ丘木道、展望台の活動のみ抜粋

■全体活動～夢ヶ丘木道を経て夢ヶ丘展望台へ(14:50)

(案内・解説:環境省 矢部自然保護官、北海道環境財団 山本)

○夢ヶ丘木道

林の奥には達古武湖が見える。上流から流れてくる水、養分などにより、上流、中流、下流と自然の景観が変化しながらつながっている。目の前に広がる林は湖に近づくにしたがって小さくなり、やがてヨシやスゲといった草に変わる。これは植物が生えている地面の環境によっており、湖に近づくにつれて水が多くぬかるむ環境になっていく。そうした水の



環境を好む植物がそれぞれの場所に優占しており、湖のそばでは、水に浸かっても生育できるヨシやスゲが生えている。展望地では景観が開け、そうした植生の様子も良く見ることができる。

木道の脇では足がぬかるむ場所があるが、泥炭が見られる場所が多くある。釧路は本州と比較して冷涼で夏は霧が多く発生する。そうした環境では、落ち葉や植物の屍骸の分解が進まず植物の遷移が残り泥炭になる。こうした泥炭が湿原や周辺に多く堆積している。また、同じ種類の植物でもまとまった範囲で背丈が短い場所、植物の先の方がなくなっているものがあるが、人間が刈ったわけではなく、シカが食べたものと考えられる。



○夢ヶ丘展望台

湿原を見ながら話を聞いて欲しい。今日の活動で沢グループが活動した沢の水、木道横の湧水などは、最後はこの湿原に流れ込んでいる。今日皆さんが見てきた景色は全てがつながり、この湿原を形作っている。眼前に見える川は釧路川、横には鉄道の線路が見えるが、本州や外国からも観光客はこの景色を見るために来てくれる。事前学習の授業でも湿原と一



言でお話ししていたが、眼前の景色を見ても分かる通り、場所によって色が違うことがわかると思う。灰色っぽいところは木が生えている場所や川の近くであったり、右の方に行くと黄緑、その間はベージュと、様々な色が見える。こうした違いは、その場所の水環境の違いからきており、それぞれの環境で生育しやすい植物が生えているため、上から見ると色が違って見える。川の近くは大きな台風が来た時などは土砂が付き林になっている。黄緑色の場所は草丈の低い植物が生えている。こうした場所には貴重な植物や動物、魚が生きており、タンチョウなど今日見ていないような動物も暮らしている。そういう生き物が暮らしていける環境というのは、今日の活動で見てもらった山と川と湿原とのつながりがあってこそ守られるものだということを体感してもらえればと思う。